

【社説】

福田首相訪中 実のある議論で友好を

2007年12月26日

福田康夫首相が二十七日から中国を訪問する。アジアを重視する首相の初訪中を中国は歓迎している。東シナ海の資源開発や台湾など意見が異なる問題も、しっかり論議し友好の実を固めてほしい。

日中両国は小泉純一郎元首相の靖国神社参拝で両国関係が緊張し、首脳相互訪問が五年以上も断絶した。

昨年十月の安倍晋三前首相の訪中で再開したが、一泊二日の忙しい旅だった。福田首相による四日間の公式訪問を中国側は「第二の国交正常化」と位置付け、田中角栄元首相を上回る歓待で迎えると意気込んでいる。

福田首相もこれに応え、国会日程が立て込む中でも、首脳会談を終えた後、日中共通の伝統文化である儒教の祖、孔子の故郷の山東省・曲阜を訪れる。地方訪問は中国の国民感情を和らげるのに役立つだろう。

しかし、懸案を封印し、友好のメール交換に終始するのは野党党首に許されても、一国の首相には認められない。日中間には東シナ海の資源開発や台湾など難しい問題がある。

日中の主張する排他的経済水域(EEZ)が重なる東シナ海のガス田問題は、今年四月の温家宝首相の来日時に「今年秋」を目標に共同開発案を作ることで合意していた。

しかし、日本側が提案した、日中中間線の日本側まで共同開発を認める譲歩案に対し、中間線を認めない中国側の姿勢は、かたくなで局長、外相協議では合意に達しなかった。

中国がガス田の操業を本格化したり、日本が資源探査に踏み切ったりすれば紛争を招きかねない。解決には双方の首脳が政治決断が必要だ。

また、台湾の陳水扁政権が来年三月の総統選挙と同時に行うという「台湾名義での国連加盟の是非を問う」住民投票に、中国は武力干渉の可能性をほのめかし身構えている。

米国は台湾海峡の紛争への危機感を強め、「挑発的な政策だ」(ライス国務長官)と台湾に圧力を強めている。しかし、台湾は住民投票を望む二百万人以上の署名などを理由に米中の要求に応じる気配はない。

福田首相は東アジアの平和と安定を脅かす台湾海峡の緊張回避に向け、中国に自制を訴える必要がある。また、日台の歴史的関係を踏まえ、台湾に露骨な圧力とは、異なる独自の働き掛けを行う意義を説明し、理解を得るべきだ。

中国が要求している台湾問題への態度表明と、東シナ海問題の進展など日本側の要求を、てんびんに掛けるのは外交では禁じ手である。率直な意見交換を通じ、立場は異なっても、お互いへの理解を深めることが真の友好に道を開くのではないか。

<http://www.tokyo-np.co.jp/article/column/editorial/CK2007122602075159.html>